

心の宝

令和4年秋号

モミジ
(和名・紅葉)
花言葉
大切な思い出、
美しい変化

宗華法本顯

あやしい宗教団体の勧誘にご注意を！

顕本法華宗布教部

宗教団体といいながら、危険な活動をする集団が存在します。

恐喝・怒号・拉致・監禁・付きまといなどの迷惑行為や脅迫で加入させたり、異性を利用した巧みな勧誘や、家庭生活が破綻するような、法外な布施・寄付金の要求もあります。急に昔の知人から連絡があつてファミリーレストランに行つたら数人に囲まれてハンコを強要されたなどの勧誘事例も多数あります。

また、あやしい宗教団体は自分たちに都合のいいように物事を解釈します。ケガをしたら「教団のために尽くさないからだ」「仏罰が当たる」と言い、良いことがあれば「ほらっ、いつかここを聞いたから」といいます。

ある団体の組織図は軍隊を真似たようなもので、隊長・支援長・組長などに分かれ、勧誘人数によって位が上がります。社会で認められないという疎外感から、このような肩書に心を踊らす信者も多く、周囲が見えなくなつ

ている人が沢山いるのです。

あやしい宗教団体の創設理由や教学はあまりにも幼稚で、まともな人間ならおかしいと気が付くことばかりです。

注目すべきはその長が生き仏・神格化され絶対的な力を行使していることです。これはもはや宗教ではないといわざるを得ません。

宗教は本来、人を幸せに、そして、人生の選択肢を増やしていくものですが、逆にあやしい宗教団体は選択肢をなくし、最終的には家族や近所付き合いも崩壊させてしまいます。

おかしいと思つたら菩提寺に相談し、「きつぱり断る」「相手にしない」「警察を呼ぶ」といった強い態度で臨みましょう。



信徒の心得

一、私たちの宗旨は顕本法華宗です

一、顕本法華宗の総本山は京都の妙満寺です

一、私たちは日蓮大聖人が定められた大曼荼羅を御本尊として篤く仏・法・僧の三宝さまに帰依します

一、私たちは妙法蓮華経と日蓮大聖人の御書を教えの拠り所とします

一、私たちはお釈迦さまを教主と仰ぎ日蓮大聖人を宗祖日什大正師を開祖として経巻相承を宗是とします

一、私たちはお釈迦さまの大慈大悲を信じて努めて菩薩の行を実践します

目次

いま大切に思うこと	2
「立正大師諡号宣下100周年」を迎えて	4
聖訓カレンダー	7
本宗・本山ホームページ紹介	10
おつとめのお経一語一話	12
檀信徒のひろば	14
ひとくち法話	15
写して学ぼう 写経体験	16
ぶらり寺々を訪ねて	18
住職からのまごころ一品	20
ケンボンクイズ	22
仏教Q&A	23
宗門だより	24
本山だより	25

いま大切に思うこと

東京都豊島区 法成寺内
特命布教師

秋葉妙琳
あきば みょうりん



この度、特命布教師を拜命いたしました秋葉妙琳です。東京の駒込にあります法成寺で副住職をしています。

さて、かつてお釈迦様は「男女は平等である」と女人成仏にょにんじやうぶつを説かれました。そして女人が唯一成仏できるお経が、私たちが一番大切にしております「法華経」です。

昔から女性は軽視され男尊女卑の風潮がありました。男性も母である女性から産まれます。お釈迦様は女性も男性と平等に、同じ信者や修行者として接してこられました。実際、お釈迦様が出家される前のお妃さまや叔母さまは、その教えの下で出家をされ比丘尼びくに（女性のお坊さん）になりました。女性蔑視くわしの時代に、つらい状況下で苦しんでいた女性たちも、仏教の登場によって、その女性たちが平等に扱われるようになり、男性に勝るとも劣らぬ生き生きとした姿を示していたことを伝える文献も残っています。

現代ではジェンダーの平等が大変注目されています。いま「男や女」といった小さな視点ではなく、「人としてどう生きるか」という大きな目でとらえることが必要かもしれません。そうすることで、法華経こそが本来の男女平等を説く、今を生きる万人の心の拠り所になると思います。

昨今は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、お寺にも沢山の人が集まることがなかなかできない状況であります。しかし、ご家族でお参りいただいたり、小さい子どもの時からお寺と触れ合うことは、仏心と、素直で正しい信仰心を自然のうちに伝え授けられる、大切な教育の場であると私は思います。

自分が大人になって、大切な人の葬儀や法事等を実施主として体験する際に、それまでにお寺との関わりがあるのとないのでは、法要式事への心構えに大きな違いが出てまいります。親から子、子から孫へと、ご先祖様を大切に供養していくことは、いのちの尊さを知ることでもあります。そして、お釈迦様・日蓮大聖人・日什大正師へと純粹に伝えられた顕本法華宗の教えをさらに伝え弘めていくことは、檀信徒として大切なことではないでしょうか。

お寺は檀信徒の皆様の心の拠り所でありますので、私は、お寺を「正しい信仰」と、法華経の魂である「お題目」をお唱えする方を一人でも増やす道場として大いに活用し、布教精進していききたいと思えます。

南無妙法蓮華経

合掌

「立正大師諡号宣下100周年」を迎えて

第4回 本多日生上人が「立正大師諡号宣下」を

目指された理由

宗務次長 千葉県経胤寺住職 小松正学



本多日生猊下。
写真提供：本多日生記念財団

これまで3回にわたって、「立正大師諡号宣下」の経緯について、本多日生上人の生涯や主義を交えながらご紹介させていただきました。今回で連載が最後となりますので、本多上人が「立正大師諡号宣下」を目指された主な理由(①法国冥合、②思想善導、③門下統一)の三つについて考えるところにも、連載についてもまとめたいと思います。

1 法国冥合

本多上人は、「(立正大師は) 国を護り立てて行

くにしても、やはり法から立てて行かなければならないというので、『立正安国論』を作られ、行者がその目的を達するにも法から離れては出来ないの、やはり如説修行と称して『如説修行鈔』を遺された」と著述されていることから、法を中心とされていることは明らかですが、一方で「性質から云えば道とか宗教とか云うものは、国家より尊いものであるが、実際に活動して行く上に於いては、国家の威力を以て保護されなければ、宗教でも道徳でも効用を顕わすことができない」と当時の社会情

勢もあつたとは思いますが、国家の保護がなければ十分な成果が得られないとも著述されています。

本多上人の活動もあり、大正期は大変な日蓮主義ブームでありましたが、本多上人は、世間的なブームを皇室・政府により公認されることによつて、より確実なものとし、法国冥合(政教一致)を目指されたのではないかと筆者は考えます。

2 思想善導

本多上人は、「宗教の根本方針は、社会を教化すること」との考えから、宗教者として思想善導に力を入れられて、仏教・神道・キリスト教の「三教会同」といった宗教協力を目的とした懇談会にも積極的に参加されています。当時の政府は、社会主義や共産主義の勃興から危機感を抱き、日蓮主義ブームで勢いがあった日蓮門下に国民思想善導を

期待しており、本多上人もまた、政府に協力することによつて『法華経』や日蓮主義がより世間に広まり「真俗如意 広宣流布」に繋がると思われていたのではないかと筆者は考えます。

3 門下統一

明治28年に本多上人が『仏教各宗綱要』*で記述された「念仏無間・禪天魔・真言亡国・律国賊(四箇格言)」が各宗協会の融和を乱すとの理由から、無断で削除されました。本多日生上人にとつての「四箇格言」とは、「仏教が肝心の釈迦牟尼仏との関係(有縁の仏とその縁を結んでいる衆生)を忘れてしまったので、そこで日蓮が四箇格言を武器にして闘い、釈尊に対する意識を復活させようとしたもの」であり、到底容認出来ず、顕本法華宗では訴訟を起こしています。いわゆる四箇格言問題が起こった

*政府の要請により、仏教各宗協会が組織され、各宗派の教義がまとめられた書物

わけですが、それにより日蓮門下内の連携意識が高まったこともあり、本多上人は、門下統一と他宗派の折伏を掲げた「統一団」を訴訟を起こした年に創設されています。

これ以外にも幾度も統合が協議されて、不調に終わっていることもあり、本多上人は、日蓮門下各派の共同意識を高め各派の統合を目指し、そればかりではなく門下統一から仏教統一、宗教統一までも視野に入れられていたのではないかと筆者は考えます。

連載のまとめ

明治・大正・昭和初期に活動された本多日生上人は、西洋の宗教や思想に対峙する必要性から仏教のみならず西洋哲学や東洋哲学など幅広く学ばれました。それにより仏教のもつ包容的中心統

一性を改めて認識されるとともに、法華経寿量品の本仏によらなければ仏教は、世界には通用せず徹底されないと考えられて、雑乱勸請撤廢などの宗門改革を実行されたのです。本多上人を中心に宗名とされた「顕本」は、開迹顕本からとられており『信徒必携』（顕本法華宗宗務院発行）によれば「インドでご入滅されたお釈迦さまは、本当は今もなお、永遠の命を持ち続け、常に人々に慈悲の心を注いでいらつしやる」という意味とされますが、本多上人の社会的活動は菩薩行として本仏の活動を補助するものであり、その中でも思想善導は宗教者として重要であると考えられていたのです。結果として、その社会活動が社会に広く認められたことにより「立正大師諡号宣下」が実現したといえるのではないのでしょうか。

〈了〉

聖訓カレンダー

解説

岡山県和気町 本成寺 早川義正

十月

日蓮こいしくおわせば
常に出づる日ゆうべにいづる月を
おがませ給え

国府尼御前御書

建治元年（一二七五）大聖人五十四歳

日蓮大聖人が54歳の時に身延において、佐渡に住む、国府入道の妻、国府尼御前へ宛てて書かれたものです。

大聖人は佐渡へ配流中の様子を回顧され、

「命をつなぐ食べ物もなく、身に着ける粗末な衣もたず、野原の中に捨てられたため、雪が肌降りかかるような有様で、かるうじて草を摘んで命をつな

いだ。そんな中、国府入道夫妻は、人目をさげ、夜中に食べ物を選び、佐渡の国の役人達の責めをもおそれず、日蓮の身を守り、身代わりになろうともされた。迫害と寒さの、つらい生活であったが、いよいよ赦されて佐渡を離れるときは、入道夫妻との別れがつらく、剃って無い髪が、後ろに引かれるようで、足が前に進まない程であった」と、国府

入道夫妻への深い感謝の気持ちを示され、そして今月のご聖訓「日月にはいつしか、わたくし日蓮の姿が宿るようになりました。もし日蓮を恋しく思われた時は、朝に出る日（太陽）夕にでる月を拝んでください」

と尼御前へやさしく語られます。大聖人のお姿を日月に見出して、お題目を唱える国府尼御前のお姿が目に見えられます。

十一月

法華經の文字は皆生身の佛なり

法華經 法蓮鈔

建治元年（二二七五）大聖人五十四歳

『法蓮鈔』は日蓮大聖人が54歳

です」

さらに、法蓮法師の亡き父上へ

もなり、父上を助け、お守りされるでしょう。父上の聖霊が、法蓮

依した曾谷教信入道法蓮へ書かれたお手紙です。

の供養のことにふれられ、

法師の自我偈読誦のことを聞かされる

たお手紙です。

「毎朝、第十三回忌に至るまで

して、娑婆世界に向かって、息子

法華經寿量品の「自我偈」を

の間、亡き父上のために、自我偈

のあなたを捧まれることでしょう。

読誦する功德の大きさを説くために、

の金色の文字が口より出ていたの

これこそが真の孝養です」と教え

に、次のように述べられ、

です。このひとつひとつの金色の

示されました。

「法華經の文字は一字一字が皆生

きた文字は、釈迦如来となり、父上の

皆さまざま毎朝のご先祖へのご供

きた仏様です。我々凡夫には文字

文字は、釈迦如来となり、父上の

養に「自我偈読誦、唱題回向」を

にしか見えませんが、実は法華經

聖霊のもとへ赴いて、父上の眼と

おつとめしましょう。

の文字はひとつひとつが仏様な

なり、耳となり、足となり、手と

おつとめしましょう。

十一月

法華經を信ずる人は冬の如し 冬は必ず春となる

妙一尼御前御消息

建治元年（二二七五）大聖人五十四歳

このご遺文は日蓮大聖人が54

を没収された、苦しい境遇の中で

となり、それと同じように法華經

歳の時に、身延の大聖人のもとへ、

のことでした。また信仰とともに

を信じる人は必ず仏となります。

妙一尼御前が衣を送られたことへ

していた尼御前の夫は、まだ大聖

法華經を信じた亡き夫は必ず仏と

のお礼のお手紙です。

人が佐渡におられる時に、病弱な

なり、この世のあなたの方のことを

尼御前は大聖人へ帰依し、鎌

妻子を残して亡くなります。

ご守護なさいます。安心して子ど

倉の地にて、堅い法華信仰を貫か

大聖人は、尼御前の悲しみに

もたちを育ててください。日蓮も

れた方です。大聖人が佐渡へ配流

寄り添うお言葉を述べ、そして今

見守ります」となります。

された時やご赦免後の身延にも、

月のご聖訓、さらに続けて法華經

大聖人の温情あふれるお手紙

大聖人へのご給仕のために自身の

信仰の功德をお説きになります。

です。私たちも春を信じ、お題

従者を送られます。

その要旨は「法華經を信じる人は

目とともに、苦しみを乗り越え

それは、弾圧迫害により領地

冬のようなものです。冬は必ず春

ましよう。